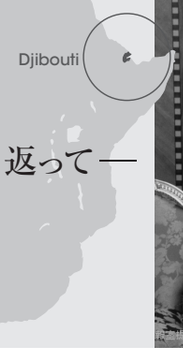
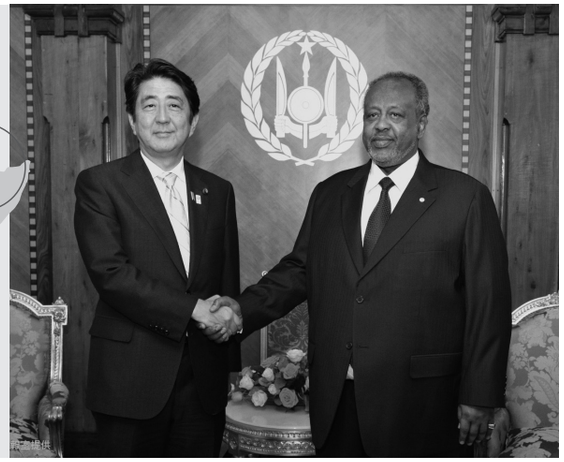
◆巻頭言



ジブチの奇跡

―安倍総理のジブチ訪問を振り返って―

在ジブチ日本国特命全権大使
西岡　淳　*His Excellency Mr. Atsushi Nishioka*



砂色をまとった空を見上げ、今日もまた暑くなるなという思いが脳裏をかすめた8月27日午前11時。尾翼の日の丸も鮮やかな政府専用機が、定刻通りにジブチ・アンブリ国際空港の駐機スポットに停止しました。日本の総理によるジブチ訪問という両国の歴史に残る出来事が始まった瞬間です。タラップの下で待つジブチ政府閣僚による出迎えをお受けになられた後、安倍総理は直ちに、空港に隣接する海賊対処行動航空隊活動拠点へと向かわれました。

我が国海上自衛隊のP3C哨戒機による海賊に対する空からの警戒活動は、2009年6月から開始されました。同拠点は、この活動を支えるために設置された施設で、決定からジブチ政府との交渉を経て、わずか2年後の2011年6月に完成しました。国連PKO活動を除けば自衛隊が海外に拠点を設けるのは画期的なことでした。ここには、警備を担当する陸上自衛官を含め約200名の隊員が海賊の危険から各国の商船を守る任務（4カ月交代）に就いています。

普段P3C機が滑走路に向かう時に使用するゲートから拠点に入られた安倍総理は、拠点司令による説明を受けつつ施設内の視察を終えられた後、昼食時には隊員たちに交じって同じ食事をとりながら、実際の任務の模様や苦労話に熱心に耳を傾けておられました。拠点訪問の締めくくりとなる訓示の中で、安倍総理は、厳しい環境の下で我が国の国益のために活動している隊員達に対する労いと励ましの言葉に次いで、「皆さんの活躍を誇りに思います」と、ひときわ緊張した面持ちの隊員たちに対して熱く語りかけられました。

ソマリア沖・アデン湾の海域では2007年頃より、商船を襲って船員を人質にとっては船会社から身代金を脅しとるという凶悪な海賊の被害が頻発しました。航行する船舶を海賊の脅威から守る目的の下、当初は自衛隊法の海上警備行動として、海賊対処法の制定以降は同法に基づき、2009年3月から、海上自衛隊の護衛艦2隻もジブチ港を主な補給地としながら、タンカーをはじめとする商船の護衛に当たっています。護衛艦には8名の海上保安官も乗艦しています。安倍総理が訪問された時は、護衛艦は海上での任務に従事していました。この海域は、年間2万隻もの商船が行き交う世界で最も重要な海上交通路に位置します。このうちの約1割は日本関係の船舶です。このことからも、この地域が我が国の経済活動にとっていかに重要性を持つかがおわかり頂けると思います。安倍総理が湾岸諸国歴訪の途次、クウェートからジブチを訪問されたのは、こうした重要性を踏まえてのことでした。

全隊員が整列して見送る中、安倍総理が次に向かわれたのは、大統領官邸です。途中、「プラス・ドゥ・トウキョウ」に差し掛かると、JICAの元研修生達が、両国の国旗を振って日本の総理の訪問を歓迎してくれています。この広場は、東日本大震災の直後、ゲレ大統領ご自身のイニシアティブで「日本国民との連帯の日」の式典会場となった場所で、その日に因んで命名されました。かつて日本の無償資金協力による市内の道路整備が行われた際の起点でもあります。

大統領官邸に到着すると、レッドカーペットが敷かれ、ゲレ大統領が車のドアの前で安倍総理を待ち受けています。握手しながら安倍総理から「ガラップ・ワナクサン」（ソマリア語の「今日は」）と話しかけられると、大統領はちょっとびっくりしたような表情の後、すぐにこぼれんばかりの笑みで総理を迎えます。1時間に及んだ会談では、エネルギー自給のためジブチ政府が進めている地熱開発に対するJICAの協力、ジブチ沿岸警備隊に対する巡視艇の供与など両国にとって重要な協力について意見が一致しました。また二国間関係のみならず、ジブチの隣国のソマリアの情勢やシリア情勢についても意見が交わされるなど、双方にとって極めて有意義な会談となりました。会談の最後には、ゲレ大統領から安倍総理に向かって「アリガトゴザイマス」。

ジブチ人は日本に対して特別の感情を抱いていると多くの人々が言います。北部部族との内戦によりジブチの人々にとって苦しかった90年代、日本が経済協力を粛々と続けていたことをジブチ国民が感謝の念と共に記憶しています。今回、安倍総理が日本関係書籍から成る「安倍文庫」を寄贈された「フクザワ中学校」もそうした時代に無償資金協力で建てられたものなのです。

不安定な「アフリカの角」に位置しながら東西冷戦の最中に独立を果たし、エチオピアやソマリアといった周囲の大国との関係を巧みに処理しつつ、内戦という危機を克服して部族間の国民和解を実現し、今や地域の安定勢力となっている人口90万足らずのジブチというこの国は、奇跡的な存在なのかも知れません。

実りの多い訪問を終え、午後3時15分、政府専用機は予定時刻通りに駐機スポットを離れ、離陸していきました。次の訪問地のカタールへ向けて機影が空の彼方に消えてしまっても、その場を去りがたく思ったのは私一人だけではなかったはずです。

（注：本稿は筆者の個人的見解に基づくものです。）